

かぎ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かぎぐるま】

2023 春号

100

公益財団法人 和歌山県文化財センター



記念特集
須賀神社本殿の保存修理

創刊100号 記念特集号



小関洋治元理事長に聞く

100号になるということは、年に4回、単純計算で行けば25年になる？

—平成13年9月が創刊号となります。

23年前…。大浦街道の建物から岩橋に移ってどれくらいになるの？

—8年くらいですね。

そんなになるかな。僕としては回想のスタートが事務所の場所のことからになりますか。海南市の国道沿いの海南一中が廃校になるんで、そこを全部出土遺物の保管場所と文化財センターにさせてくれと。結果的には実現しなかったけれど、旧知の海南市長神出さんに談判に行ったわけです。

—そうですね。

結局は今の、岩橋千塚の近く（紀伊風土記の丘の敷地内）に。その時（平成19年）、僕は64歳で、現職（和歌山県教育長）をやめて最初の年ですね。現職の頃より忙しいのと違うかなと思うくらい、美術館・博物館や和歌山・関大、WBSなどあちこちと行っていた時期ですね。

（当時のセンターの）建物といったら、決して立派とは言えないもので、これは何とか

せな、というのが第一印象でしたな。現在の岩橋の建物も、それ以前と比べると大分ましになったんだよね。

もう一つは、私が赴任するまで長い間新たに技師を採用するということがなかった。文化財センターは、人の力でやることが多いですからね。ヒューマンパワーというか。埋蔵では2・3歳違いの似たような年代ばかりだったんで、若手を、世代交代を含めて補強のために入れていくことが重要ではないかなと。あの時、皆反対したんですよね。センターというのは独立採算だから、将来的にどうなるかが見通しが立ちにくいですね。人件費負担が重なってきて運営が困難になる恐れが常にあるわけ、受託事業の多少によってね。確実に将来性が保証されていない中で、センターとして独自に人を採用するというのは冒險ではないかと考える人が多かったな。少々乱暴なところがあるかもしれないけれど、本当にこの時に人を補強するというのが必要とあったわけですね。おんなじような年齢に偏っているから、大量退職時代が確実に起こってくるわけですから、その時全部人が入れ替わったら引き継ぎができない。段階的に、と言うことで採用試験したんやな。たくさん応募があつてね、採用する側では嬉しい悲鳴を

あげていて、最初は1人でよいと言っていたけれど、勿体ないと言うことで2人採用した。

元々私の本職は、歴史の教員なわけですね。

考古学でもないし、民俗学でもないし、建築の専門でももちろんないけれど、センターというのは面白い勤務先でしたな。特に文化財建造物の現場なんて見る機会がなかったものだから、両分野の現場というか最前線へ僕が行っても邪魔になるだけかもしれないが行かせてくれ、と随分あちこちへ行かせてもらいましたね。埋蔵での思い出は、皆さんあまり覚えていないかもしれないけれども、高速度路複線化の工事の昔の吉備町になるんかな。

—藤並地区遺跡ですね。

今の有田川町やね。その他は京奈和道路関係かな。かつらぎ町で大規模集落が出た。

—中飯降遺跡では、大型建物跡が出ました。

かつらぎ町ができるだけ保存するという話に発展していったね。

—現地で（遺構の）剥ぎ取りをして移設して保存されています。

先日、50年ぶりに開通したと言われた通称水軒通り（県道13号線）の、竈山神社の北側あたりかな、東西の道と南北の道が交差するところ（和田遺跡）で、道路幅も広いので発掘も広範囲だったな。

新しいところでは、「風車」で長いことコラムを書いてきた村田氏が、再任用で新宮に行っていた。新宮城下町遺跡（現、新宮下本町遺跡）の現場を見に行った時に、神倉神社に初めて登ったんですよ。その時に付き合っ
て登ってくれたのが彼。そういうことと関連付けて印象に残っていますね。

建造物の方では、まずは旧中筋家住宅、あれ長かったから。10年かかったかな。大変な事業やったね。所有者の問題とかもあって、苦労をしたな…。

水軒通りも50年もかかったのは、土地問題や立退きと用地買収がうまくいかなかった。そこに和歌山県の文化行政や道路行政の難しさがある。（建造物の場合）文化行政の観点から言うと所有者との関係で苦労をする。国宝のある高野山の金剛三昧院、あれは鳴海くんがまだいてたかな。

—鳴海さんの最後の現場です。金剛峯寺不動堂を終わって、金剛三昧院に行く計画だったけれど、準備が整わなかったので、先に粉河寺大門を修理しました。その次に金剛三昧院が始まりました。鳴海さんは途中で終わって、引き継がれました。

間に粉河寺が入ったんか。不動堂も修復工事の最中に行った記憶がある。その後で落慶

法要をするんですが、それに招待された。お堂の中で、正式な格式の高い法要を体験できたのもよかったですね。

あと建造物関係で印象深かったのは、下津（現海南市）の福勝寺、熊野参詣道の道沿いにあります。新聞の連載の続編で取り上げた紀北の熊野参詣道では、藤白王子を一番に、次に福勝寺を書きましたが、書くことと現地を見に行くことやつぱり一体となっている。文化財センターをやめたあとでも、現場へ行った時の思い出というか、経験というか、財産になって今日まで続いている。そういうことから見え所へ勤めさせてもらったなと思っていますよ。まあ現場の邪魔をしたと言っことやけどな。

風車についてはたくさんあって全部は無理なので、総論的に言わせてもらいます。この冊子が作られた趣旨とか、対象とかを考えた時に、一般向けの意味合いがありますよね。関心を持って理解を深めてもらいたいということがあると思うんです。

コラム「歴史小話」はずっと連載されていたんかな。

—カラーになった43号から続いています。初めは建造物は鳴海さん、埋蔵は村田さん。

この役割は大きいと思うんですよ。発掘の調

査報告等、他の欄は専門性を貫いています。和歌山の文化遺産の価値なり、現状なりを正確に伝えるという話ですわな。それはそれで風車の本筋というか、中心的なページであろうとそのことぐらいはわかるんです。専門性が強ければ強いほど正確に記述しようとするけれども、読む側にとっては、必ずしもわかりやすいということに直結しないものですわな。調査報告を理解してくれる人もいるだろうから、あえてそれを否定するわけではないですが。

この小話のコラムは、当事者の息遣いもろに出ている面があるんですね。もちろん正確に書いているんだけど、技術者の人となりや人間性が滲み出ている文章のように思われます。その点で鳴海氏と村田氏の両方も僕は知っていますから、「あー、あいつだったらこういうことを書くやろう。」と想像たくましくしながら読んでいたわけです。文化財に対する理解をより深めてもらうのに大きな役割を果たしているなど。携わっていないのは人間なんやでと。村田くんには書けないような文章を書くでしょ。

—ちよつと洒落な感じで、落ちがあつて。彼はそれが嬉しくて書いている。軟らかに表現することで、読者にアピールしている。

そういうわけでコラムの持っている値打ちは

大きいと思います。両部門のキャップが書き始めて結構長かった。20回分ぐらいかな。

—村田さんで33回、鳴海さんで16回。

その2人の文章を読みながら、特色がよく出ているなと思いましたよ。

—風刺画のお話バージョンみたいなもの。

—そうそうそう。風車ではそういうコラムを設けて小話と呼ばせているのは、それが入っているのかなと思ってた。

—そこまで考えていた？でも、村田さんの文章、それに近いところがありますね。

彼は、ヤンチャ坊主的なところがまだ抜けていませんな。

—(94号が)村田さんの最後の文章です。

—おおー「ヒューミント」、インテリジェンスの世界やで。人的情報やね。

—小説「神の手」の主人公をたとえに出して説明しています。我々後輩に向けての言葉として残して頂いています。

発掘屋さんの村田さんのヒューミントの重要性、それが現れているのがコラムですね。刺身に例えるとワサビみたいなものかな。鳴海くんは基本真面目人間、真面目のように見えるのでないところもいっぱいあるのに、見せないようにしているのだね。という風なことを含めておもしろい人がいっぱい

たんですよ。

壊れて修理に出していたパソコンが帰ってきたので、これを機にセンターのホームページを検索したらYouTubeで田之上さん(インタビュアの一人)が、九度山町の「入郷遺跡」で発掘現場の説明をしていましたね。他にSNSでやっていることはないんですかね。

—YouTubeは地宝のひびきなどを編集して流しました。あとLINEでイベント等のお知らせをしています。

ちなみに、この風車は何部印刷しているの？

—1500部です。

この紙での発信よりも、だんだんSNSでのが主流になりつつあり、影響力は無視できないので、相当力を入れていかなければならない分野かもしれねえ。広範囲に影響力を発揮するわけで、できるだけ柔らかく、風車の小話のごとく…。ざっくり言ったら「私これ、これ好きよ！入郷遺跡のここおもしろいんやして。」というようなトーンで伝えられれば、専門的な立場から建造物にしろ埋蔵にしろ、惚れ込みよう、入れ込みようが生に伝わってくる。こういうことは決して排除されなくていいと思っています。生身の人間がやっている仕事ですから、喜怒哀楽とか好

き嫌いが滲み出てきてね、決して悪いことではないと僕は思っているんですよね。

限られた人生ですよ、いかに楽しく充実した仕事になるように工夫をするかと、そこに知恵を働かせれば開けてくる世界というもの、ぐつと多くなるように思うんです。それはいろんな人に通じるんですよ。村田流のちよつと捻ったやり方と鳴海流の一見真面目でどぼけた味がある、どっちも、書いている人の背後に仕事が見えてくる。仕事が見える文章、それを皆が目指して書いているわけだよな。

風車というのは文化財センターの窓口というか、そこにいろいろな人がいて仕事をして、その人の息遣いが伝わってくるような媒体に、よりなっていくてもらえたらなという風に将来の希望としてありますよ。

—ありがとうございます。



小関洋治先生

1942年山形県鶴岡市生まれ。東京教育大学(現筑波大学)を卒業後、和歌山県立桐蔭高等学校に社会科教諭として赴任した。1998年から8年間にわたり県教育委員会教育長を務めたのち、2007~2009年まで財団法人和歌山県文化財センター専任理事長として在任。主な著作に「紀州つづら折り」(和歌山新報社)、「写真アルバム 和歌山市の昭和」「海南・有田・御坊・日高の昭和：写真アルバム」(樹林舎)等。

工楽善通前理事長に聞く

もう100号を迎えるのだな。(総目次を見ながら) 100号だけどまとめてしまったらこんな簡単なのだね。55号に「公益財団法人移行にあたって」と、鈴木さん(鈴木嘉吉元理事長)が書いているんだね。

そうか(風車が)模様替えしたっていうのは、どこからでしたかね。

—43号からカラーになりました。

センター設立後の途中から発刊しだしたのですね。

—はい。建造物でいえば、粉河寺大門の修理からです。旧中筋家住宅もこの頃からです。

大門の修理の時は、始まる時だったか僕達も委員の皆で修理現場へ連れて行ってもらったかな。

表紙では、これ(54号 特集すさみ町・立野遺跡の発掘調査)が印象的なんです。立野遺跡は2年に分けて調査して、我々も連れて行ってもらったというか、現場で落ち合っを見せてもらった。さすが木の国和歌山だなーと感激しました。

2011年に終わった年か次の年に成果報

告のシンポジウムをやりましたよね。

—地宝のひびき(報告会)と紀州のあゆみ

(展示会)もです。

私は木製品に興味があったから、これは非常に印象的でした。この報告会の当日配布する冊子にレポートを書いて欲しいと頼まれ、会場にお越しの皆さんに理解し易いように図を沢山掲載してもらいました。

未製品も結構あって、そして報告会のあつた次の年か、センターが風土記の丘の敷地に移った年に、木器をやっている研究会(出土木器研究会)で、全国からといったら大げさだけど、東京から福岡に至るまで40人くらいは集まったのではないかな。立野遺跡の遺物も紀伊風土記の丘の方に持ってきていたものですから、そこで皆さん集まって、木器の研究会を1泊2日で実施してもらい、川崎さん(調査担当者)から説明を受け好評でした。ちょうど(風車の)中間点ぐらいなのです。立野遺跡はやっぱり思い出深い。発掘現場もそうですし、報告会も。

やっぱり、現場に連れて行ってもらった所は印象に残っています。中飯降遺跡も…。2015年だもの大分古いな。10年近く前だ…。これが現場を見に行った最後かな。和歌

山城だとか近くは行きましたけどね。

—(最近は)大きな現場がなくなりましたから…。

まとまった面積の公共工事がガタツとなくなつたものね。

—この建物(パンフレットの表紙の)建物跡も高架の下で保存されています。剥ぎ取りの模型展示で、ぜひ直で見えてみたくたかなと思ひながら、模型を見ております。

よく保存できたよね、移設が可能となつて。それから水軒堤防ね。水軒堤防が16年。

19年ってどこだったかな。

—新宮(現・新宮下本町遺跡)、村田さんがやっていました。

建造物で、(理事会で)スライドを写してもらった旧西村家住宅。西村伊作さんとは僕は話をしたことがある。東京の文化学院で院長をしていた時に文化学院でお会いしたことがあって、飄々とした先生で。これはもう修理が完了してしまったのか。地元で利用されているのか。いろいろ活用されているのか。—新宮市の所有で、公開施設として活用されています。

一度、機会があったら見学に行ってみます。

私は、建造物も理事会の時にスライドを映

してもらって、普段行けない修理現場、金剛三昧院だとか熊野本宮大社とか、スライドで現状や修理状況を見せてもらうのが楽しかったです。

村田さんにもOBとしてインタビューしているのですか？

—原稿を書いてもらっております。

鳴海さんも…。鳴海さんは今も和歌山にいるのですか？

—はい。

鳴海さんは、いつまでいらっしゃったのか？

—金剛三昧院の途中までです。粉河寺大門の後、金剛三昧院に行きました。

粉河寺大門にはいたのかな。現場に行った時に、多分鳴海さんの説明だったんでしょね。

立野遺跡の遺物は保存処理してセンターにあるのですか？

—今は県に移管しております。

県にということは、風土記の丘ではなくて別に収蔵庫があるのですか？

—他にも収蔵庫はありますが、展示できるものは風土記の丘にあると思います。風土記の丘で展示したりしております。

本当はね、未製品とかも見学できるように普段から常時展示できるようになればいいけどな。センター（で発掘した）のものも含めて資料がずいぶん増えてきているので、和歌山県として置き場と展示施設の充実がこれからの大きな課題となりますね。

例えば新宮城下町遺跡（現・新宮下本町遺跡）の遺物は地元にくののですか？

—市の施設の（事前）発掘調査であったので、市の方で保管しております。

それはまあ、市で保管し、公開するのが良いね。

—今後のセンターについて御意見頂ければと思います。

地元へ返す、県教育委員会へ戻すという以外に、センター自身で持っているものもあるのですか？

今はセンターで保管していても、ゆくゆくは返却していく方向でしたら、じゃあやっぱり紀伊風土記の丘資料館が、県の展示施設になっているから、そこをリニューアルという計画があるのであれば、そういうことを視野に入れて展示室を充実して、展示会（紀州のあゆみ）以外に、文化財センターの発掘調査

で出土したものなど、文化財センターの成果として常時展示できる施設がほしいですね。全国各地のセンターで展示施設を設けているところもあるでしょう。センターの成果の展示会という日時が限られた時だけでなく、常時センターのこれまでの成果が発表できて、図書も併設して、併せて報告書も見られるという施設が、風土記の丘の施設の中には是非入ってほしいですね。

兵庫県は瀬戸内側と日本海側で大分離れているということもあって、但馬にも施設もっており、和歌山の場合も和歌山市の周辺と、新宮・熊野は交通の便が名古屋から下っていった方が早いのもかもしれないけれど、南北に長い、距離的にも離れているよね。新宮の太平洋側の方に分室なり設けて、調査の際もそこをベースキャンプにしているいるのでしようから、太平洋側の方に出張所や分室なりができて新宮方面の出土品が展示できると、新宮市でもやっていると思うけれど、新宮市以外のものも発表公開の場が設けられる施設ができればいいけれど。

—埋蔵文化財の公開活用がいわれているところですし。

活用が大いにうたわれているところだが、

遺跡そのものの公開活用もそうであるけれど、出土品を展示し、毎年調査したら報告書を出して行っているわけですからその報告書も併せて、図書資料として公開して見られるようにして、できるだけ地元の人に愛着を持って、興味を持ってもらうために、北側の拠点と南側の拠点となる施設が是非ほしいと私は思います。

地元説明会や風車で初めて郷土の文化財の存在を知るといふ人もいるわけだから、文化財のためのそういう公開施設がほしいね。図書館はこの町にもあるのですが、そういう所に併設すると目立たなくて忘れられてしまうから、文化財の独立したものがなとついつい忘れられてしまって、離れてしまうことになる。文化財の職員を常時置くなんてたいへん難しいけれど、和歌山の場合はこちらで調査して、文化財が分散しているから拠点になる施設が離れた所でほしいですね。そういう所があれば、発掘調査の時にそこがベースキャンプになるでしょうし。

文化財センターももう少し財政的に稼げればいいんだけど・・・今はどこも稼げる手当がないから難しい面があるけど・・・

和歌山の場合は、建造物だってあちこちに散らばっているよね。山奥に結構いい文化財

があり、行きにくい所にあるものもあるし、新宮の方で熊野の関係とか、熊野古道に面した建物とか、展示といっても写真とか主な資料になるかと思うけど、そういうのが山奥に行かなくても見られるような資料館みたいなのが、拠点的な所に併設するということは十分あると思いますけれど。

「気になるところを質問・説明しながら、風車のページをめくり進めている。」
水軒堤防の時もまだこの段階やたったんやな(45号)。

―復元されたものしか見ることができないのですが。

―復元してあるんだっけ。

―道路建設によって撤去された部分が、場所を変えて近くの駐車場に移築されています。

―そうやな、村田さんはいつも風車にコラムを続けていたもんな。ゆうといて、私はいつもおもしろく読ませていただいておりました。そら、村田さんは書かんといかん。

―工業先生からのご指名、なかなかないですよ。お伝えしておきます。

3・4年ぐらい続いていたかな。

―村田さんと鳴海さんも書いていました。

鳴海さんのも結構続いていたんやね。

―鳴海さんは建築彫刻で：。その後は皆で書いています。

―若いのが書くと深みがなかなか出ないですね。

―そうか、旧中筋家住宅もきれいに出来上がったんやね。これ長かったよね。これ2回ぐらい現場連れて行ってもらい、興味深かった。後日、この住宅の利用状況をぜひ見たいと思います。

―すごいな99号でこれだけあるのか？

―100号は、20ページに増やしていこうと思います。今日はどうもありがとうございました。



工楽善通先生

1939年兵庫県生まれ。明治大学大学院修了。奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長をへて、現在、大阪府立狭山池博物館 名誉館長。2014・2015年に公益財団法人和歌山県文化財センター理事長を在任し、現在同理事。主な著作に「水田の考古学」(東京大学出版会)、「古代の水田跡とムラ」(「稲のアジア史」3、小学館)、「探訪弥生の遺跡―西日本編―」「探訪弥生の遺跡―畿内・東日本編―」(有斐閣)等。

櫻井敏雄理事長に聞く

皆さんは(印象に残った)修理・発掘現場をあげられると思いますが、私は携わった方やお会いした人を通して遺構を見ている気がします。

センターで印象に残っていると云ったら、センターと言うか和歌山県とのつながりは、県の審議委員となつてから……私は委員の中で古参になりますね。

修理現場で最初に思い起こすのは、国宝観心寺(大阪府)の修理の際におられた竹原さん(竹原吉助・和歌山県の文化財建造物の修理を手がけた)。そこでもいろんなこと教わつてね。それと金剛寺(大阪府)の摩尼院の修理をやっている時も。その時は竹原さんと恩師の淺野先生(淺野清・法隆寺の修理に携わり、現在の文化財修理の方法を確立した)と私の三人で、修理の現場でいろいろ話を聞かせてもらいました。ああいうのは本当に血肉になつていくのかな、今の皆さんはそういう機会がなかなか得にくいので、それは残念だなと思つてますね。岩下さん(元県教育委員会職員)達と和歌山県の調査に一緒に行くとな、本当によく勉強しているなと思つきましたね。県文化財課(現、文化遺産課)には山本さんや寺本さん

を始め皆さんがいて、和歌山のレベルの高さを思いましたね。高橋さん(元県教育委員会職員)もあの頃よく真面目に岩下さんについて手足になつて調査もよくやるしね。岩下さんには、最初、びっくりした。こういう中で鳴海さんなどは育つていったんだなと思つきましたね。

僕は大学院の頃から淺野先生のもとで夏冬は重文を調査して回り、重要な解体修理現場があると、遠くまで足を伸ばして写真機材を持って子供をして歩きました。元興寺文化財研究所においでの間も評議員というか、調査研究のお手伝いで、おそばに居ましたね。

和歌山県も先生と重要なものは見て回りまして。元理事長の鈴木先生とも東北の調査で先生のお供で三人で一緒したこともありましたね。

昔は今より余裕がありましたし、現在は時間に追われていると思うけれど、センターの間でも教わつたり聞けたりする時間や雰囲気が必要だと思つきますね。文化遺産課の人とも。

古建築を学ぶためには現場に行かなければならず、普通の生活の中では、なかなかそうした時間をとることはできませんね。

和歌山県を見直すだけでも大変なので、なんとかして時間やそうした雰囲気を作つて行かなければならないのでしょうが、難しいんですよね。そういう風なことを少し昔のこ

とから、思いました。今の風車の原稿からちよつと外れちゃうけど、文化財に関わった方々を思い出しましたね。

私はそれぞれの解体現場にはそれほど行かなかつたんですよ。鳴海さんと高野山経蔵の彩色を見にいった記憶がありますが、二、三の現場には行きましたが、一番行きたいのは事前調査をしている時で、いろいろな疑問が出てきて、それを投げあつて検討するところですかね。

以前にセンターの研修旅行の際、私が考古と建築を結ぶような話をしてから、翌日、みんなで一つの建物を調査しながら議論している姿を見て安心しました。

皆さん、時間に追われながらもちゃんといて、いいだろうと思つていたし……。

こうしたことは別に、私が思ったのは、和歌山県の隣接地域の物を見なくていいのかなと思つきましたね。和歌山のことをやっているとそれが和歌山だけのことなのか、それが周囲の建築とつながっているのかどうか。その辺のことは大丈夫なのかということの時々思つていました。

そういう心配は今でもちよつとありますね。近世社寺の場合は、かなり地域性があります。知りたがる勝負になることがありますよね。これは、ここに最初に出てきたものだ

といたら、他にあったりしてね。

もっと驚くようなことをお話しすると、二軒の建築で地垂木が平行垂木で、飛檐垂木が扇垂木と言う建物がありますよ。垂木のない建物も…。知っているとあまり困らないんですね。もっとも和歌山の建築は伝統的な形態のものが多くですけどね。

これまで、井口専務理事とお話をする中で、何が大切かと聞かれましたので、必要なものは時間とお答えしました。調査したり研究したりする時間が私たちには必要なですよ。作る報告書も変わってきます。

お話をする中から研究する時間を通常の勤務の中に取り入れる必要であるのかなと言う意味のようなことを、言うてくださった時には、うれしかったですね。頼りになる方なんだなと思いました。これは言うべきことではないかもしれませんが、井口さんがセンターに来られる前に前知事が夜に電話を下さってお人となりを説明してくれました。

風車を見て感じたのは、ちょっと言いにくいのですが、粗密があるのですよね。それと文章がうまい人と下手な人が。少し感じたことがありましたね。

また、あまりにも砕けすぎて、これをとい

う物がなきやいけないのに出てなくて、単調な文章になってしまっているのが少し残念に思いましたね。ちょっと面白く、ちょっと難しくしていただければ、…。こんな難しいことを言っているのかな。

それから、これは期待なんですけれど、センターは考古学と建築の両分野があるので、考古の方で寺院や建物の発掘等していますね。その時に建築の人の発言がないのが、少しさみしいですね。多分それだけ忙しいのですね。でも、伽藍の特質だとか、建築の方から何か一言あってもいいような、建築史的に見たらこうだと言うような…。想像を膨らませる…。例えば雨落ちから見ると、軒の出ははこのようになるのか、少し具体的に、古代の伽藍のなかで位置づけると、こんな位置づけになるとか、そういう意見がほしいなと思いますね。意見の交換から学問だけではなく、活用のアイデアとか、こうしたらいいとか、建築の人は結構、そういうの得意なんですよね。こうした触れ合いが作れないのは時間がないのだなと、私は理解しているんです。本当はそのことを言いたいんですけれどね。

所員数も欠員のままで、こんなに充分とは言えない環境の中で皆さんよく頑張って、こんなにどうして頑張れるのかな。というのが

僕の率直な感想なんですけれど（笑い）。

こうした事情は、これまで問題としながらも対処できなかったのですが、職員の数についても減少をしている中で整理して、積極的に対処して行く目標を立てていただいたのが井口さんで…。本当に感謝です。

それだけでなく、和歌山県はとても動きにくくて、谷筋に入ってまた出での繰り返しで…。調査や普及活動、活用をしようとしても、人がいるのですね。紀南のほうは大変で、本来は分室や展示の施設のようなものがあるんです。市町村の指導や協力もしていかなければならないんですからね。これからは観光と活用を兼ねた市町村の基本計画まで策定することも起こるかもしれませんね。世の中が大きく変化し、文化財保護法自身も変わりがつある中で、それに対応した組織の在り方、研鑽の仕方も固定化しないで、それに対応するように研鑽を積むことも忘れてはいけませんね。但し、文化財の基本は忘れないで。

広く見ることによって、考え方の足りなさには、はっと気がついたり。知識を広げることでも、思いついたりしますよね。それはとても大切です。こんな時期ですからなかなか難しいと思いますけど、今やっておかないと…。

考古も例えば、「問い」を作って答えるよ

うな書き方とか、少し面白くしてほしいんですね。今は人を引き込んでわかってもらおうとかが私達に要求されているので、そのためにも皆さんのバックグラウンドを広く強くしていくが必要な気がしますね。

風車を見ていて思ったことですが、この中から小さな冊子を作ったらと思うのがあるんですね。

考古も手を入れたら面白いのがあるので、小冊子（ブックレット）のようなものを作ったかどうかと。ポケットなんかに入る新書版ぐらいの幅で薄いもので、和歌山を紹介する。例えば鳴海さんの建築彫刻のシリーズとか。他にもありますよ、シリーズで書いているのが。

原稿がもつたいないので、少し手を入れて、簡単に読めるような形で出したら売れそうな気がします。なぜそういうことを申し上げるかという、例えば和歌山の社寺建築は彫刻が見応えがあるのですよね。興味のある人はどこへでも行きますよね。その意味では、考古は多くは埋め戻しまするので、その見せ方をどうするかが大切になってきますね。ですから本が売れると言うことにも…。石造物の好きな人も多いですね。灯籠とか、石塔の類。これほどこの分野もそうですけど、どのような方法で一般の方を引き込んで魅力を伝えるか、とても

難しいですが、その方法は考えないと…。

「風車」はパンフレットの形式をとるのできちんと保存してくれるかとか、一回限りで捨てられてはと言うことを考えると、これもそれなりに纏める機会があっても…。風車のような（パンフレット）もあっていいけれど、いろいろな原稿があるので、まとまりのあるものは更に薄くまとめて…。蓄積が効くような形にして活用していく、同じものを形を変えて活かしていく…、方法を考えては…。

例えば中にも古代寺院や建築的遺跡もあるし、沢山ありますね。小冊子できるな…。スペインではこの種のものに、大分、お世話になりました。

—センターの今後とか、提言みたいなことをお願いします。

そうですね。今回理事会で説明があったように、ここ五年ほどのきちっとしたセンター中期運営計画が、井口（専務理事）体制でできたものが実現することをとても期待しています。

これまでの事情をきちんと分析・把握され、またおりにふれてお話しした事も、考えてください、足下からきちんと固めてくださったと、私は思いますね。

計画には長期のものと短期のものが必要だ

と思いますが、この不安定な時期にきちんと計画ができた事は極めて重要なことで、実を結ぶことを期待しますね。

困難がないとは言いませんが、計画だけに終わらないよう、実現に向けて、言わない、主張しない事は一番いけないことと思います。我慢して、みんなが悪くすることにならないよう職員の皆さんの一人ひとりにセンターの役割を再確認してもらい、活用についても知恵を出してくださいることを期待しています。

職員の皆さんとともに、人間の歴史と言う、この無限の蓄積の前に手を振るうのですが、あきらめないで前向きに歩んで行くことにしましょう。

—本日は、ありがとうございました。



櫻井敏雄先生

1939年東京都生まれ。大阪市立大学院工学研究科博士課程修了。近畿大学理工学部建築学科講師、同学科教授、大谷大学客員教授等、恭仁京、紫雲宮発掘調査委員会委員長を歴任。1978年に「鎌倉新仏教仏堂平面の成立と系譜に関する研究」で東京大学博士号取得。2000年度に「近世仏堂建築の系譜と社寺建築の基本計画・空間構成に関する一連の研究」日本建築学会賞(論文)。2016年より公益財団法人和歌山県文化財センター理事長。主な著作に「伊勢と日光」(「新編名宝日本の美術 第18巻」)(小学館)、「西国三十三所豊場寺院の総合的研究」(中央公論美術出版)、「浄土真宗寺院の建築史的研究」(法政大学出版局)、「奈良県史」(建築編)(名著出版)、「奈良市史」(市役所)等。

『風車1〜99号』総目次・特集

『季刊情報誌 風車』も、今年度で100号の刊行を迎えました。特集の目次をもとに、その歴史を振り返らせてみました。

創刊号



- 1号 日高郡南部町・南部川村 徳蔵地区遺跡の発掘調査
地域の子供たちとのふれあい―南部町徳蔵地区遺跡から―
- 2号 徳蔵地区遺跡(高田土居城跡) 現地説明会
- 3号 高田土居城跡出土の溶解炉(炉体)転用井戸について
- 4号 体験学習における子供たちとのふれあい―吉備町藤並小学校・南部川村清川中学校―
- 5号 センター考古学講座開催中
- 6号 発掘調査最前線 橋本市柏原遺跡の調査
- 7号 発掘調査最前線 大日山35号墳の発掘調査
- 8号 発掘調査最前線 野上中南遺跡の発掘調査
- 9号 発掘調査最前線 柏原遺跡の第2次発掘調査
- 10号 第14回文化財センター速報展「紀州の歩み」開催中
- 11号 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会の開催
- 12号 県指定史跡 水軒堤防発掘調査
- 13号 シンポジウム「県指定史跡 水軒堤防を考える」
- 14号 重要文化財 福勝寺その1
- 15号 重要文化財 福勝寺その2 瓦と屋根
- 16号 太田黒田遺跡(県1次) 発掘調査中間概要報告
- 17号 重要文化財 福勝寺その3 棟札と墨書
- 18号 旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査の概要
- 19号 太田黒田遺跡(県1次) 発掘調査概要報告2
- 20号 重要文化財 福勝寺その4 建物の復原

22号

特別史跡岩橋千塚古墳群 大日山35号墳 第3次発掘調査の概要

23号

調査事務所リニューアルオープン 地宝のひびき―第1回和歌山県文化財調査報告―の概要

24号

重要文化財 福勝寺その5 本堂の解体修復作業

25号

野田地区遺跡 出土の犁、発掘調査の概要

26号

旧中筋家住宅のいま―保存修理の進捗状況

27号

旧吉備中学校校庭遺跡 第二次調査の概要

28号

第12回全国埋蔵文化財法人連絡協議会 近畿ブロック埋文研修会「土木技術の考古学」

29号

京奈和自動車道(紀北東道路) 遺跡の発掘調査 西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡

30号

シンポジウム「高田土居」シンポジウムの概要・総評、アンケート結果報告

31号

和歌山城跡三の丸発掘調査

32号

紀三井寺 文化財建造物の保存修理―第1回―

33号

第4回 歩いて知るきのくに歴史探訪―西国三十三箇所観音霊場 第三番札所粉河寺を歩く―開催

34号

京奈和自動車道(紀北東道路) 遺跡の発掘調査その2 西飯降Ⅱ遺跡、丁ノ町・妙寺遺跡

35号

県指定史跡 水軒堤防 発掘調査概要報告

36号

紀三井寺 文化財建造物の保存修理 第2回 塗装調査からわかったこと―1

37号

京奈和自動車道橋本道路発掘調査「考古資料から見た紀ノ川上流域の弥生文化」

38号

京奈和自動車道遺跡の発掘調査その3 「丁ノ町・妙寺遺跡を中心に」

39号

紀三井寺 文化財建造物の保存修理 第3回 塗装調査からわかったこと―2

40号

京奈和自動車道遺跡の発掘調査その4 「かつらぎ町・丁ノ町・妙寺遺跡の縄文集落」

41号

京奈和自動車道橋本道路発掘調査「考古資料から見た紀ノ川上流域の弥生文化」

誌面のカラー化

42号

京奈和自動車道(紀北東道路) 遺跡の発掘調査その5―西飯降Ⅱ遺跡を中心に―

43号

文化財センター通信「風車」、新誌面になりました!

44号

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査「中飯降遺跡の調査」

45号

重要文化財金剛三昧院保存修理工事「客殿及び台所について」

46号

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査「西飯降Ⅱ遺跡の調査」

47号

「北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査」

48号

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査「重行遺跡の調査」

49号

向陽中・高等学校体育館建設に伴う「秋月遺跡の発掘調査」

50号

重要文化財 旧中筋家住宅の竣工

51号

重要文化財金剛三昧院保存修理工事「客殿及び台所の修復トピックス」

52号

和歌山橋本線道路改良事業に伴う「神前遺跡の発掘調査」

53号

北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査

54号

すさみ町 立野遺跡の発掘調査

55号

熊野本宮大社の修復トピックス

56号

大古Ⅱ遺跡の発掘調査

57号

かつらぎ町 西法田遺跡の発掘調査

58号

根来寺遺跡の発掘調査

59号

和歌山城跡の発掘調査

60号

神前遺跡・井辺遺跡の出土遺物

61号

文化財建造物竣工特集 熊野本宮大社

62号

長保寺、金剛三昧院、熊野那智大社

63号

和田遺跡の発掘調査

64号

平井Ⅱ遺跡の発掘調査

65号

和田遺跡の第2次発掘調査

66号

重要文化財丹生郡比売神社本殿保存修理工事―塗装工事における新発見―

67号

小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡発掘調査

68号

平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査

69号

重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷の保存修理工事について

70号

平井遺跡第3次・第5次発掘調査

71号

木津遺跡発掘調査

72号

和歌山城跡の整理

73号

新現場紹介

74号

幻の寺 別寺―小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館発掘調査整理業務から―他

75号

登録有形文化財の保存修理

76号

安楽寺多宝小塔の保存修理

77号

寺内古墳群、相方遺跡 第2次発掘調査の概要

78号

旧西村家住宅の保存修理

79号

山口古墳群、根来寺遺跡の出土遺物整理

80号

新宮城下町遺跡第1次発掘調査―縄文時代から中世の遺構―

81号

田屋遺跡第2次発掘調査

82号

旧西村家住宅の保存修理(2)

83号

旧名手本陣の保存修理―妹背家住宅と御番所―

84号

東城跡の発掘調査

85号

旧西村家住宅の保存修理(3)

86号

新宮城下町遺跡の第2次発掘調査

87号

熊野地方における文化財建造物の修理について・熊野那智大社の境内施設整備事業

88号

和歌山城三の丸の発掘調査

89号

旧名手本陣妹背家住宅の保存修理

90号

―現状変更と耐震補強―

91号

熊野古道見どころ整備事業

92号

景観重要建造物大福院本堂の保存修理

93号

―建物の復原考察とその過程について―

94号

護国院三社権現の保存修理

95号

結城城跡、里野中山城跡の発掘調査成果

96号

吉原遺跡の発掘調査成果

97号

關雞神社の保存修理工事

98号

且来Ⅵ遺跡の発掘調査について―新たに発見された方形周溝墓―

99号

木ノ本八幡神社本殿の保存修理工事



2022 夏号

- 99号 藤崎弁天 弁天堂の保存修理
- 98号 尼寺観音寺跡の発掘調査
- 97号 続いた集落
- 96号 田屋遺跡の発掘調査―場を変え長く
- 95号 木ノ本八幡神社本殿の保存修理工事
- 94号 且来Ⅵ遺跡の発掘調査について―新たに発見された方形周溝墓―
- 93号 關雞神社の保存修理工事
- 92号 吉原遺跡の発掘調査成果
- 91号 結城城跡、里野中山城跡の発掘調査成果
- 90号 護国院三社権現の保存修理
- 89号 景観重要建造物大福院本堂の保存修理
- 88号 熊野古道見どころ整備事業
- 87号 和歌山城三の丸の発掘調査
- 86号 旧名手本陣妹背家住宅の保存修理
- 85号 熊野地方における文化財建造物の修理について・熊野那智大社の境内施設整備事業
- 84号 新宮城下町遺跡の第2次発掘調査
- 83号 熊野地方における文化財建造物の修理について・熊野那智大社の境内施設整備事業
- 82号 東城跡の発掘調査
- 81号 旧西村家住宅の保存修理(2)
- 80号 旧名手本陣の保存修理―妹背家住宅と御番所―
- 79号 山口古墳群、根来寺遺跡の出土遺物整理
- 78号 新宮城下町遺跡第1次発掘調査―縄文時代から中世の遺構―
- 77号 田屋遺跡第2次発掘調査
- 76号 旧西村家住宅の保存修理
- 75号 安楽寺多宝小塔の保存修理
- 74号 寺内古墳群、相方遺跡 第2次発掘調査の概要
- 73号 登録有形文化財の保存修理
- 72号 幻の寺 別寺―小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館発掘調査整理業務から―他
- 71号 新現場紹介
- 70号 和歌山城跡の整理
- 69号 木津遺跡発掘調査
- 68号 平井遺跡第3次・第5次発掘調査

「風車」の100号に際して思うこと

(元文化財建造物課課長) 鳴海 祥博

私が和歌山で文化財建造物の修理に従事したのは、ちょうど50年前のことだった。その頃は、監督、主任、補佐、棟梁、大工など僅かな人間で組織された修理現場の全ての目標は、修理の完成であり、私にとっては日々現場に従事できることが生き甲斐で、充実した日々だった。

それから15年ほどして「財団法人和歌山県文化財センター」が発足し、ある日突然、「組織の一員」となった私は「文化財センターのため」に働くこととなったのである。身分や社会保障は充実したが、「修理現場の完遂」を最大の目標としていた私にとって、「文化財センターの一員」としての種々の規約や業務は、ややもすれば煩わしく制約と負担と矛盾でしかなかった。人事管理や労務管理に関する様々な指導は受けたが、センターという組織は一体何のために存在し、何を目指すのか、そのような理想や展望や希望めいた話は聞いた記憶がない。

当時の私にとって、文化財センターという組織は決してよき理解者とは思えなかった。



風車第3号 (平成 14年 1月)
粉河寺大門の修理工事

やがて、文化財を取り巻く環境に変化が生じた。「保存」とともに「活用」という視点である。現場公開や情報発信などを通して、文化財の意義を広く社会に知って貰うことの必要性が求められたのである。

建造物修理は、事業の成果が「竣工建物」という形で残る。それは修理技術者としての目標であり生き甲斐であり、社会に対する貢献だと思っていた。そのため、修理中の公開や情報発信には、関心がなかった。普段目にするものの出来ない修理中の状況は、実は古建築を理解する貴重な機会なのだが、そこにはなかなか思いが至らなかった。

社会の変化に応え、センターが組織として取り組んだ企画が「風車」だったと、私は思っている。そしてこの時、建造物、埋蔵、管理の各課職員が「文化財の情報発信」という一致した目標に向かうことが出来たと、実

感した。ようやくセンターの組織としての目標を見つけたように思えた。

「情報発信」、それはセンターが社会に対して果たすべき大きな社会的役割の一つである。職員全員がそういう意識を共有するとき、各現場でのそれぞれの職務に専念する者にも、組織人としての意識が芽生える。日々の現場業務の成果をセンターとして社会に発信する。その役割を担う「風車」は職員の自覚とセンターの組織力を高める、またとないツールだと、私には思える。

私が現役を引退して10年余り、「風車」の歩みは一〇〇号となった。もはや、私がセンターに対して抱いていた疎外感などは、遠い昔の話である。

「風車」を通して文化財センターが今後とも成熟した組織となるよう願っている。



丹生都比売神社楼門

鳴海氏が平成3年から6年にかけて修理を担当した現場。上層を持ち上げて仮設構台で支持し、下層を解体修理した。

文化財建造物課の業務内容

当課では、歴史的建造物の保護のために、左記のことを業務としておこなっています。

- 一 文化財指定建造物保存修理の技術指導
- 二 史跡・名勝等を構成する建造物の保存整備技術指導
- 三 歴史的建造物の調査、保存修復計画
- 四 登録有形文化財の登録支援・修復支援
- 五 史跡・名勝等に復元新築する建造物の技術指導

●文化財指定建造物保存修理事業の流れ

- ①修理前
修理前に建物を詳細に実測し、破損や改変箇所等の状況を十分に把握します。写真等で現状を記録し各部材に位置を記した番付札を取り付け、解体の準備を行います。
- ②仮設工事
作業を安全かつ円滑に進め、解体した部材などを保管するため素屋根（屋根付きの作業用足場）や工作保存小屋を建設します。
- ③解体工事
建てられた時と逆の工程で造作類や屋根から順番に建物を解体します。工程ごとに調査や記録を行い、慎重に作業を進めます。

④調査

建物の変遷を知るため、各部に使われている部材や釘等の痕跡を丁寧に調査します。

解体しないと確認出来ない部分等に記された墨書や保管されていた古文書等から、建立や修理の年代が確定することもあります。剥落したり塗り替えられた塗装面も、痕跡や顔料分析により、かつての模様や色が復原できることもあります。

木部の解体後、発掘調査や地盤の調査も行い、必要に応じて基礎の修理や補強も行います。

⑤現状変更

調査等により建物の歴史が判明した場合、建立当初の姿や、より価値が高いと判断された時代の姿に復原修理することがあります。また耐震診断の結果必要と判断された場合、補強材を組み込むこともあります。

⑥部材の補修・新調・組立

破損した部材も可能な限りもとの材料を生かして補修します。新たに補足する場合はオリジナルと同じ樹種の木材を用います。瓦や金具等も同様に復原や補修を行います。修理の終わった部材は、もとの位置に戻し、組み上げていきます。伝統的な工法で施工するため、文化庁により選定された保存技術の有する職人の技術が必要となります。



關雞神社本殿小屋組の修復

元の部材を建物の保存に影響のない限り再利用し、腐朽して使えなくなった部材は同じ樹種の木材で取り替えている。

⑦完成

組立が完了し、必要な防災設備等を取り付けて仮設を解体すれば工事は完成です。竣工写真を撮影し、工事の記録や調査内容を編集した修理工事報告書を発行して事業は完了します。



①塗装修理前の葺股



②塗装の調査中



③塗装修理後の葺股

關雞神社上殿の塗装の調査と修理

隠居老人独言記

（元埋蔵文化財課参与）村田 弘

オラは春になるとふつふつとヤル気というか闘志がわいてきます。まちがっても新たな論文を書くなどという気はないよ。ヤマザキの「春のパンまつり」です。あのシール集めに忙しい。

パンまつりが、春の歳時記、国民的行事と言われるまでになったのは、松嶋奈々子の笑顔だけではなく、ひとえに43年という、その歴史の積み重ねですね。

さて、この季刊誌『風車』も100号を迎えたとのこと。歳月にして25年。慶賀。事を成すにあたっての必要な力は、瞬発力ではなく継続力です。このことを思うと頼もしく、うれしい限りですね。

この風車には、オラは長きにわたって「発掘屋余話」なる雑文を連載させていただいた思い出があります。連載にあたっては、誰もが気軽に読み、時にくすつと笑ってもらえるような読み物にしたいと心掛けました。この種の刊行物にありがちな型切り文句や陳腐な文章だけは書くまいと決めていました。「難しいことを優しく、優しいことを深く、深いことを面白く。（井上ひさし）」というのが

オラの信条です。文章というのは、読まれてなんぼの世界ですよ。

おかげさまで、手前みそではありませんが、連載中は紀南の名刺のご住職から「あのオチ、法話で使わせてもらっています」とか、昨年からは滋賀県立大で講じておられるS君には「毎回、爆笑ですわ」と声をかけていただきました。うれしかったですね。それにしても、よく筆禍事件を起こさなかったなあ。今頃になって冷や汗だぜ。

在職中には、もちろん数多くの発掘調査、それに係る報告書作成業務を担当させていただきました。それぞれに思い入れがあり、それにまつわる思い出があります。総じていえば、幸せな発掘屋人生でした。

もちろんオラひとりの力ではない。現場では常にオラの倍以上働いてくれたスーパー補助員Y君、報告書作成時には、怠惰なオラの尻を叩いてくれたT嬢など多くの補助員・作業員の助けがあったからのこと。さらに言えば管理課の諸氏には、いつも背後から支えていただきました。あらためて「発掘」というのはチームワークなのだとの思いに至っています。

それにしてもたくさんの現場を掘ってきたねえ。正直に書いておきますが、オラは

何度となく掘り間違いをやってしまいました。完璧に掘り切ったという現場は、ひとつとしてないと言ってもいいぐらいです。現場は期間と予算に限られたフィールドです。そこで求められるのは、常に果敢な決断力です。担当者が迷っていたら、それ以上に補助員や作業員の手が止まってしまいます。どうか怖れることなく掘り進めてください。その上で掘り間違いに気づく技師になってほしいと切に願います。でないと言文字通り「墓穴」を掘ることになるぞ。

以上、先輩面をして勝手気ままに書き綴りました。

最期にこの季刊紙『風車』の命名由来を記しておけば、たとえ微力な風であっても、この和歌山の地に文化の風を起こそうとの願いを込めています。小さな風も、回りつづけることで大きな旋風になり得ます。文化財センターのさらなる奮起と活躍に期待したい。



風車 58号表紙
特集：根来寺遺跡の発掘調査

埋蔵文化財課の業務内容

当課では、文化財の保護のために、左記のことを業務としておこなっています。

一 埋蔵文化財発掘調査事業

委託者から依頼を受け発掘調査を実施し埋蔵文化財の記録保存を行います。



二 埋蔵文化財出土遺物等整理事業

委託者から依頼を受けて実施した発掘調査出土遺物等の整理作業を行い、報告書を刊行します。

三 埋蔵文化財確認調査等支援事業

委託者が実施する記録保存目的もしくは保存目的の発掘調査への技術支援を行います。

四 埋蔵文化財出土遺物等整理支援事業

委託者が実施する埋蔵文化財包蔵地出土遺物等の整理作業への技術支援を行います。

五 文化財計画策定・調査事業

史跡等保存活用計画策定事業において文化財関係部分の計画作成支援を行います。

また、普及活用事業として、以下のイベント等を行っています。

一 シンポジウム・報告会の開催

県内の文化財調査に関連する基調講演と主要な発掘調査成果等を報告しています。資料集を作成し、主要な調査成果資料等とともに、その他各地域で近年に実施された調査成果についても誌上に掲載しています。

二 歴史探訪の開催

関連のある史跡等や埋蔵文化財の場所や説明を記載したマップを作成し、それを活用して職員等が各遺跡等の解説を行い、県民の皆様とともに歩きます。

三 文化財調査成果展の開催

埋蔵文化財の発掘調査及び出土遺物等整理事業の成果をいち早く県民の皆様公開するため、県内会場で出土遺物・写真パネル等の展示事業を開催しています。

四 埋蔵文化財概要パンフレットの作成

埋蔵文化財発掘調査の成果概要のパンフ

レットを作成し、当センターの各種イベントや各博物館を通じて埋蔵文化財発掘調査成果の公開活用のため、配布しています。

五 過去調査の撮影フィルムのデジタル化

当文化財センターによる発掘調査で既刊の報告書に掲載したもののうち、フィルムカメラで撮影したものをデジタルデータ（H264ファイル）に変換して、それを今後、特設サイト等を用いた発掘調査成果の公開等を企画しています。

六 発掘調査説明会・現地公開

当センターで実施した発掘調査について、県民の皆様に関心を持って遺構、出土遺物や写真パネル展示を行い公開しています。

七 その他

文化財に関する調査研究成果を公表する研究紀要の発行、埋蔵文化財に関する座談会の実施、整理作業の体験等を行なっています。



地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会 2022—
報告資料集 表紙

特集 和歌山県指定文化財 須賀神社本殿の保存修理工事

1. はじめに

みなべ町西本庄に所在する須賀神社では、昭和62年の修理以来屋根面の傷みが進んで来たため、和歌山県とみなべ町の補助を受けて、令和3〜4年度の2カ年事業で、本殿3棟の屋根葺替・塗装修理を実施しました。

須賀神社は今から千年前、一条天皇の時代に京都の八坂神社から祇園宮を勧請し、南部荘の総鎮守としたのを由緒としています。江戸時代後期編纂の『紀伊国名所図会』に当時の境内が紹介されています(下図)。第一殿の正面には「梅二鶯」の彫刻を据える他、亀や水牛など生活に関わる題材や八幡信仰との関係を示す題材等、地方色も豊かです(左写真)。



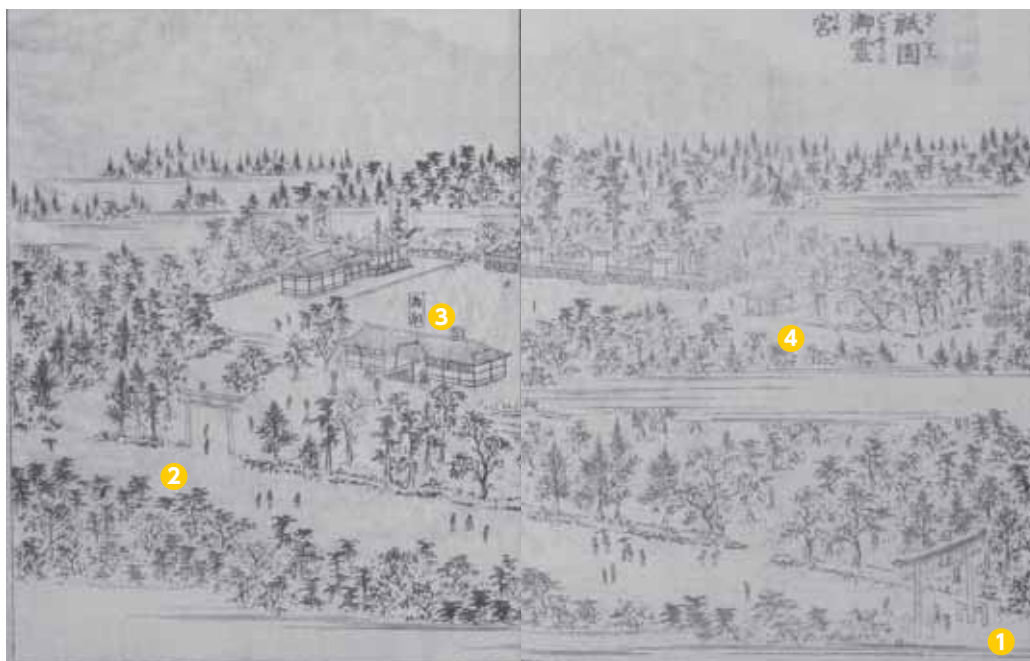
第一殿向拝の臺股彫刻「梅二鶯」



第三殿側面の臺股彫刻「鳩」



旧拝殿屋根の留め蓋瓦「鳩」



『紀伊国名所図会』にみる祇園御霊宮(現・須賀神社)の境内(丸囲み数字は下写真に対応)



3. 旧拝殿から臨む本殿と拝殿(拝殿左奥に第二殿と第三殿が見える)



4. 手水舎の名残(天保4年(1833)銘の水盤が残る)



2. 二ノ鳥居前から見た旧拝殿



1. 一ノ鳥居から見た馬場(例祭時には馬駆けを実施)

2. 保存修理について

今回の修理では、檜皮屋根の葺き替えに合わせて、劣化した木部の補修と、明治39（1906）年に塗り替え、昭和43年に部分補修されて来た塗装・彩色の補修も行いました。

木部の補修に際しては、第一殿の小屋内で享保4（1719）年の墨書が確認でき、同5年の第二殿棟札、同6年の第一殿と第三殿の棟札の存在と合わせて、300年前に再建された建物群であることも整理されました。

各殿の外まわりは、赤や白、緑や黒で塗り分け、柱の上方や組物、彫刻された部材は彩色が施されています。100年が経過した塗膜は変色や劣化が進み、剥落した箇所も多くありました。修理の方針は、明治期の施工を剥落止め（糊分の補充）と補彩（欠失した塗膜を色合わせしながら補足）で整えていきました。

その施工中に得られた情報からは、外観の塗装の変遷を再建時（当初）、江戸後期（中古）、明治期（現状）の3時期に整理できました。その一例に、軒を受ける桁（横材）は、当初は丹土（赤色顔料）で一色に塗り上げ、中古に七宝繋ぎ文様や唐草文様等が描かれ、その次に現状の雲文が描かれます。その雲は、現状だと白地に描いた様ですが、実は藍（染料系塗料）が褪色した結果の姿と判りました（次頁写真）。



修理中の本殿屋根（同右、第三殿は未施工）



修理前の本殿屋根（南東から見る、手前が第一殿）



修理中の本殿（同右、彩色部補彩・単色塗り後）



修理中の本殿（第二殿、彩色部剥落止め後）



修理後の本殿全景（同右、棟まわりは黒色に整備）



修理前の本殿全景（南西から見る、手前が第三殿）



第一殿背面（藝股「楓・鹿」、頭貫木鼻「亀」「犬」）



第二殿背面（藝股「亀」、頭貫木鼻「水牛」「象」）



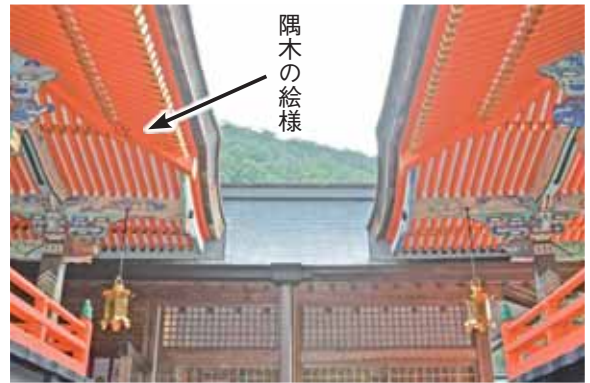
第三殿背面（藝股「流水・葵」、頭貫木鼻「猿」「馬？」）



明治期の向拝桁彩色（第二殿、変色や剥落が進むなか、部材の裏側で施工当時の色味も判明した）



近世期の向拝桁彩色（第一殿「七宝繋ぎ・四弁花」）



第一殿・第二殿の軒裏見上げ（隅木の形状は共通し、第一殿のみ墨塗りの絵様を加えられている）

3. 各殿の細部意匠の違いについて

須賀神社の本殿はいずれも隅木入り春日造・檜皮葺で共通の形式ですが、第三殿は第一殿・第二殿よりやや小さく（凡そ98%に）造られています。その関連か、茅負という軒先部材の配色も変えられています。第一殿の軒先では他の二殿には無い意匠も加わります。これらは、第一殿に素戔鳴尊、第二殿に櫛稲田姫命、第三殿には八柱御子神がそれぞれ主祭神として祀られていることから理解できそうです。ただ、これとは繋がらない共通項や相違点も併存し、そのいずれもが第一殿と第三殿が共通し、第二殿は左記の通り、両殿よりも複雑な意匠となっているのです。

（一）背面の拝懸魚は、第二殿は「三ツ花懸魚」で、第一殿・第三殿は「燕懸魚」とする。
（左上写真3枚）

（二）正面扉の棧の構成は、第一殿・第三殿は上下均一だが、第二殿では上方に縦棧を加えない。（次頁上方中段写真）

（三）脇障子（縁の両脇後方で彫刻された部分）に当たる高欄擬宝珠柱の頂部は、第一殿・第三殿は蓮の蕾型で、第二殿は蓮の花を咲かせる。（次頁上方中段写真）

第二項については微妙ですが、第一・三項からは第二殿が格上の意匠となっています。



(第二殿)



(第一殿)

本殿の細部意匠比較：扉棧と柱彩色



(第三殿)



本殿の細部意匠比較：茅負の配色と脇障子前の擬宝珠柱



(第二殿)



旧拜殿に掛かる鈴緒（参拝の旧態を一部残している）



天保10年（1839）の絵馬に描かれた本殿と拜殿

4. おわりに

これらの差異について考察できる資料として、神社には江戸後期の境内を描いた絵馬も伝わります（上写真）。この絵馬を見ると、中央・第二殿前方の鳥居が明らかに大きく描かれています。この表現は冒頭に紹介した名所図会でも共通します。一方で不可解な点も残ります。それは、割拝殿形式（建物中央が「馬道」と称する通路になっている）の旧拜殿が、絵馬や名所図会の制作よりも少し前、文政11（1828）年の再建なのですが、その馬道の先には第一殿が存在しているのです。現状からは旧拜殿が移設された様子は無さそうで、はたして第一殿と第二殿のどちらが中心的な社殿だったのか？興味は尽きない部分です。

以上、今回の修理を通して見えて来た建物の特長とそこに垣間見る須賀神社の歴史を紹介しました。文書資料等を確認できてはいませんが建物からは、江戸時代中期には第二殿を中心とした信仰形態が存在した模様です。享保期の棟札にみる再建順に関しても、同4年から6年にかけて、同時か並行して各殿の再建に掛かり始め、第二殿が最初に完成、続いて第一殿と第三殿が完成していった様にも思われます。発見と同時に新たな疑問も生まれた事業となりました。

（下津健太朗）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2023年 春～2023年 夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 令和4年度春期企画展「岩橋千塚古墳群のはじまり—花山地区の古墳—」
2023年3月18日(土)～2023年6月18日(日)

和歌山県立博物館

- 特別展「きのくにの小浪華—湯浅ゆかりの文人の書画—」
2023年4月29日(土)～2023年6月18日(日)

高野山霊宝館

- 令和5年度宗祖弘法大師御誕生大法会記念展「お大師さまから・お大師さまへ」
2023年4月15日(土)～2023年10月9日(月・祝)

和歌山市立博物館

- 企画展「新収蔵品展」
2023年3月11日(土)～2023年5月14日(日)
※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。
- 企画展「弥生・古墳時代のムラ—市内津秦・井辺・神前周辺—」
2023年5月30日(火)～2023年6月18日(日)

目次

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1 表紙 | 14 記念特集④「隠居老人独言記」 |
| 2 記念特集① 歴代理事長に聞く | 15 埋蔵文化財課の業務内容 |
| 10 記念特集② 「99号総目次:特集編」 | 16 特集:須賀神社本殿の保存修理工事 |
| 12 記念特集③ 「風車」の100号に際して思うこと | 20 催し物案内 |
| 13 文化財建造物課の業務内容 | |

編集後記

当センターは昭和62年に財団法人和歌山県文化財センター、平成23年に公益財団法人和歌山県文化財センターとして設立し、理事長は、小関洋治氏(平成19～21年)、故・鈴木嘉吉氏(平成22年)、故・森郁夫氏(平成23～25年)、前理事長である工楽善通氏(平成26・27年)、現理事長である櫻井敏雄氏(平成28年～)が務めてこられました(平成18年までは県知事が理事長を務めていました。)

当センターの活動の速報報告として、平成13年9月に創刊した『文化財センター通信 風車』は当初、白黒印刷の冊子で始まりました。平成20年にはより幅広い世代の県民の皆様にお手に取っていただけるようにカラー印刷になり、現在は年4回刊行することで季刊情報誌となりました。

この『文化財センター季刊情報誌 風車』が今年度で100号を迎えるにあたって、櫻井敏雄氏、工楽善通氏、小関洋治氏から、当センターの思い出、今後の文化財保護とセンターの役割等への想いについて語っていただいたものを100号記念特集としました。またカラー化した43号から「きのくに歴史小話」として長年に渡って連載を担当してきた元文化財建造物課・鳴海祥博氏、元埋蔵文化財課・村田弘氏から寄稿を受けました。

風車100 (2023・春号)

令和5年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



LINE公式アカウント

ID: @942tjyhk

